太平洋戦争中　なぜ新居浜市は焼野原にならなかったのか

藤田　稔

私は昭和５年（1930）愛媛県新居浜市垣生に生まれ、育てられた。垣生は山と海に近く自然に恵まれた山紫水明の里である。

実家は木造平屋一戸建て（30坪）で、庭（土地）は広く200坪あった。父は市役所に勤務していた。母は野菜作りが得意で、土地を耕し、トマト、キュウリ、ナスビ、じゃがいもなどを栽培していたので年中新鮮な野菜が頂けた。

垣生小学校１年生から6年生まで私は首席を通した。私は両親の愛を一杯受けて育てられた。「勉強しなさい」と怒られたことは一度も無かった。

４年生の学期末に通知表を頂いた。

各学科１０点満点ですべての学科が１０点で平均点１０点と記入されていた。

人間には誰でも得手不得手がある。全知全能の神様でない限り平均点１０点はあり得ないと思われた。

私は思い切って担任の先生の所に伺った。

先生は「藤田君、君は級長としてよくクラスをまとめてくれている。また勉強の出来ない子には丁寧に教えてあげている。欠席児童がいたら家にまで行って様子を聞いてきて先生に報告してくれる。先生はとても有り難いと思っているのだよ。また通知表についてだけど１００点満点の試験をして９６点とったとする。この場合１０となる。藤田君の成績はすべて９６点以上だったから１０をつけたのだよ。問題は無いだろう。先生は君を愛している。これからもクラスの面倒を見てやってほしい。よろしくね。」とおっしゃった。

私は「先生よくわかりました。有り難うございます。」と言ったとき、なにかこみ上げてきて、うつむいて泣いた。この日のことは生涯忘れ得ない。

当時の中学校は現在のような義務教育制度ではなく小学校六年生の成績表、身体検査、面接試験があり、授業料も年 60 円であった。したがって、ある程度学力があり、家庭が裕福でないと受験できる生徒は少なかった。私の小学校の場合、定員 50 名であったが、中学校を受験した者は１０名しかいなかった。

中学校に行けない生徒はそのまま実家の農業や漁業を手伝い、そのまま後継者になっていった。昭和 15 年（1940）に愛媛県立新居浜中学校が設立された。市内唯一の中学校である。市内に一つしかないので受験生が殺到した。

私が受験した昭和 18 年（1943）には A,B,C,D の 4 クラスで定員 1 クラス５０名、合計２００名の募集に対して４００名の受験生があり、倍率は2倍であった。

面接試験の時、面接官の先生が私を指名して「桜を詠んだ和歌を言ってください」といわれた。私は瞬間的に頭が真っ白になったが、父が購入していた日本文学全集を読んでいたので、かすかな記憶をたどりながら、「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」と答えた。

先生は「よろしい」と言われてにっこりされた。この面接の効果があったのかどうかはわからないが、なんと私は 200 名合格者中一番で合格し、１年Ａ組の級長を命ぜられたのである。

戦争はますます激しくなり、食べるものも着るものも事欠くようになっていったが、私の父母は何も考えずに勉強だけしなさいと言ってくださり、独立した勉強室を作ってくれた。このご恩は一生忘れられない。

昭和１８年５月、外国人捕虜２００名余が一時的に新居浜市惣開町にある森實運輸（株）の宿舎に収容され

た。

捕虜の人種は英米、オランダ、オーストラリア、インドネシアで、戦場で投降してきた軍人及び一般の現地人たちであった。

昭和18年6月には新居浜市磯浦に収容所ができて全員移動した。

昭和19年6月には新たに400名余の捕虜が送り込まれてきて新居浜市山根の収容所に収容され、昭和20年8月の終戦時には624名の捕虜がいた。

新居浜市長は国際法に準拠して捕虜たちを丁重に扱った。食事も寝所も申し分なかった。ただ（月）～（金）は住友系の各工場で軽作業を行っていた。

さて、一番驚いたのは、中学校1年A組の親友 O 君が、「藤田君、日曜日には捕虜とフリーに会えるようだよ」との情報をもたらしてくれたことであった。

当時は戦争中のため英語の授業を中止する中学校が多かったが、新居浜中学校の校長、野崎東夫先生（東京大学文学部英文科卒）は米英と戦争しているからこそ敵国の言語を学ばなければいけないと強い信念を持たれており実行された. 私は中学1年から必死で英語に取り組んだ。

そこで捕虜と自由に会えるのは英会話出来る絶好のチャンスととらえ、O 君と相談して「英会話レッスンを受けたいので面会に来ました」と言って門衛を説得して通してもらえないかということであった。

5 月のある日曜日の昼休みに私とO君は英語の教科書とノートと鉛筆を携えて惣開町にある捕虜収容所を訪問した。守衛さんに訳を話すと容易に収容所の広場に案内された。各国の外国人が広場でくつろいでいた。

私は勇気を出して、ある背の高いハンサムな青年に近づいて挨拶した。

青年は快く私たちを受け入れてくれた。まず自己紹介、新居浜中学1年生の学生証の提示、英会話のレッスンの希望などを述べた。青年はにこにこしながら話を聞いてくれた。

私は中学で習いたての英語の一節を暗記していたので、いきなり、Will you kindly tell me the names of the week？と発音すると青年は Oh yes, Sunday, Monday, ... ときれいな発音で答えてくれて私たちのノートに美しい字で書いて下さった。私はその時初めて米国の週の始まりは日曜日であることを知り、一寸不思議に思ったのである。

色々片言まじりで話していると青年の故郷はロサンゼルスで、奥様と子供2人が住んでいること仕事はハリウッドで映画のカメラマンの助手をしているとのことであった。私達は米映画「キングコング」を見ていたのでさらに話はもり上がった。

私が感じたのは立派な米国の青年が見ず知らずの敵国の少年達にやさしく、丁寧に接してくれたことはなんと度量の大きいことだろうと感動したのであった。私はお礼として富士山を画いてある扇子一本を差し上げると大変喜んで下さった。

あの青年は終戦後無事に故郷に帰られたのであろうか時々思い出しては胸が熱くなる。

昭和18年当時、新居浜市の人口は約 5 万人であった。新居浜市は四国最大の工業都市である。別子銅山、住友化学（株）、住友金属鉱山（株）、住友重機機械工業（株）、住友アルミニウム（株）、住友共同電力（株）があり、戦争需要のためフル生産で活気に満ちていた。

しかし戦争が激化する中、若い男性は次々と召集され、戦地にむかった。残されたのは老人、女、子供たちであった。これでは充分な生産は出来ない。

日本政府と軍部は計画的に大量の捕虜を新居浜市に送り込み生産に従事させようとしたのではなかろうか。

しかし実際には言語の問題もあり、重要な設計、製造、組み立てなどの高度な業務にはつけさせなかった。当

時の人の見聞によると別子銅山の採掘作業、電気設備の保守、点検、新居浜駅における貨物の積み下ろしなどを行っていたという。

太平洋戦争が昭和16年（1941）12月に始まり、昭和20年（1945）6月まで新居浜市は B29の爆撃を一度も受けていない。昭和20年7月24日 B29が2機飛来し、1機が1個ずつ2機で2個の爆弾を落とした。これが最初で最後であった。これにより住友軽金属工場およびアルミニウム倉庫が一部破壊されただけで人的被害はなかった。

一方愛媛県の首都である松山市は昭和20年7月26日に B29、60機が来襲し、爆弾および焼夷弾による無差別爆撃を受け、被災人口6万2000人（全人口11万7000人の53%）、被災戸数1万4000戸（全戸数2万6000戸の55%）の被害を受け焼け野原となったのである。

同じくタオルと造船で知られる今治市も昭和20年4月26日に無差別攻撃により焼け野原となった。

これは一体何を意味するのであろう。

新居浜市は四国第 1 の工業都市であるにもかかわらず、B29による大空襲はなく、無傷のまま生き延びたのである。

この理由は624名もの連合国側の捕虜が収容されていることを知り、B29による爆撃を行わなかったのである。

私は米国の情報収集力に驚嘆する。

捕虜を丁重に取り扱い、重労働もさせず、快適な食事と寝所を供与した功績により新居浜市長は後に表彰されている。

私は今更ながら新居浜に生まれ、育ったことを神に感謝している。と同時にこの太平洋戦争で被災され、あるいは無念にも亡くなられた方に心からお見舞いとご冥福を捧げたい。

石油分析化学研究所　研究所長
工学博士（大阪大学）　技術士（化学）
藤田　稔

2024年10月20日